

# 般舟三昧経「行品」前半部の考察

—阿毘達磨を手掛かりとして—

吹 田 隆 徳

## 1. はじめに

般舟三昧の主な説明は本経の「行品」と呼ばれる章にて行われ、内容から前半（PSS 2D-2J）と後半（PSS 3A-3O）の二部に分けることができる<sup>1)</sup>。後半部では、仏を作意する（*manasi-Kṛ*）という実践が場所や期間などの詳細と共に説明されており、この部分に関しては既に検討を加えた（吹田 2016）。一方、今回の考察対象となる前半部では項目の列挙という形式を取り、「般舟三昧とは何か。…精進を放棄しないこと、善知識に仕えること…」と説明するが、本来的に関連性のない項目で定義しようとするために不可解になっている。

この前半部を対象とした考察が未だ行われていないばかりでなく<sup>2)</sup>、ここに見られるのが大乘に特有の形式として知られることから看過することができない。本稿ではまず、この部分で示される定義の成り立ちから考察を始める。そして、今回はその手掛かりを阿毘達磨に求める。特に論師による定義の成立論などを参照すると、そこに説かれる理屈と同じものがこの部分にも当てはまる可能性が見えてくる。さらに、般舟三昧がなぜこのような不可解な説明を必要としたのかという目的についても言及したい。

---

1) 今回は『三卷本』（T.418）の章立てに基づいて「行品」前半部とした。

2) Skilton 2002は主に〈三昧王経〉における三昧の意味を研究したものであるが、その際に今回の対象部分についても言及している（Skilton 2002, 63-69）。しかし、この前半部を直接の対象とした研究は未だ行われていない。また本稿は、平成三十年度佛教大学仏教学会学術大会に於いて「『般舟三昧経』第二章前半部の考察」という論題で口頭発表した内容を再構成したものである。

## 2. 1. 前半部の概要

まずは前半部の概観から始める。項目は複数に渡っており煩瑣であるから、以下に省略して引用する。

*bzang skyong / de la da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i  
ting nge 'dzin de gang zhe na / 'di lta ste / sangs rgyas la dmigs pa'i sems yid la  
byed pa / sems mig-yeng ba / dran pa nye bar gnas pa / shes rab thob pa / brtzon  
'grus mi gtong ba / dge ba'i bshes gnyen rnams la bsnyen bkur byed pa / stong pa  
nyid kun tu sten pa / sgom pa / mang du byed pa / sgrib pa rnams spong ba /  
rmugs pa dang gnyid rnam par spong ba / gtam yongs su spong ba / sdig pa'i  
grog po rnams rnam par spong ba / dge ba'i bshes gnyen rnams la nges par sten  
pa / dbang po rnams mi g-yeng ba / zas kyi tshed shes pa / nam gyi cha stod dang /  
cha smad la mi nyal ba'i brtzon 'grus dang ldan pa / gos dang / zas dang / mal  
stan dang / na ba'i gsos sman dang / yo byad rnams la mi chags pa / dgon pa la  
gnas pa mi gtong ba / lus la ched che bar mi byed pa / srog la mi lta ba / lus gtong  
pa / sems can la phan 'dogs pa /... chos kyi dbyings la 'jug pa / nam mkha'i kham  
yongs su shes pa / sems can gyi kham la mngon par mi chags pa / mi skye ba / mi  
'gag pa / gnas pa med pa / mya ngan las 'das pa'i dbyings mngon sum du gyur pa  
/ shes rab kyi mig rnam par sbyong ba / chos thams cad la gnyis su med pa / byang  
chub kyi sems la mtha' dang dbus med pa / sems kyi rgyud gcig tu gyur pa / sangs  
rgyas thams cad dang thogs pa med pa'i ye shes la 'jug pa / ye shes la sgrib pa  
med pa / byang chub kyi phyir sems yongs su smin pa / sangs rgyas kyi ye shes  
gzhan la rag ma lus pa / dge ba'i bshes gnyen rnams la ston par 'du shes pa /  
byang chub sems dpa' rnams la mi 'byed pa / bdud kyi las rnams rnam par spong  
ba / 'gro ba thams cad sprul pa dang mtsungs pa / de bzhin gshegs pa blta ba la  
mig yor dang mtsungs pa / byang chub kyi sems yongs su tsol ba / pha rol tu phyin  
pa rnams la sems mnyam pa / de bzhin gshegs pa rnams blta ba la yang dag pa'i  
mtha' dang mnyam pa / sangs rgyas thams cad la yon tan gyi chos thams cad  
mnyam pa, 'di ni / bzang skyong / da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa*

*zhes bya ba'i ting nge 'dzin ces bya'o* // (PSS 2D-2J)

バドラパーラよ、そこで、その般舟三昧とは何か。すなわち、(1) 仏を対象とした思いに集中すること (\**manasikāra*)、(2) 心を乱さないこと、(3) 自覚 (\**smṛti*) を維持すること、(4) 智慧を獲得すること、(5) 精進を放棄しないこと、(6) 善知識たちに仕えること (\**paryupāsana*)、(7) 空性を実践し (\**āsevita*)、修習し (\**bhāvita*)、多く行うこと (\**bahulīkāra*)、(8) 諸々の妨げ (\**āvaraṇa*) を除くこと、(9) 昏沈と睡眠を払うこと、(10) 談話を断つこと、(11) 悪友たちを捨てること、(12) 善知識たちと親しくすること、(13) 諸根を動揺させないこと、(14) 食事の量を知ること、(15) 初夜と後〔夜〕に眠らない努力をもつこと、(16) 衣と食事と臥具と病を治す薬と資具に執着しないこと、(17) 林住を放棄しないこと、(18) からだを重視しないこと、(19) いのちを顧みないこと、(19) からだを〔他者のために〕放棄すること、(20) 衆生を利益すること、(中略) (130) 法界に入ること、(131) 虚空界をよく知ること、(132) 衆生界に執着しないこと、〔それを〕生じないもの、滅しないもの、とどまらないもの〔とみること〕、(133) 涅槃界を目の当たりにすること、(134) 清浄なる智慧の眼を清めること、(135) あらゆるものを不二〔とみること〕、(136) 菩提心に始まりも終わりもその中間もないこと、(137) 心の相続が異ならない (\**cetas ekotībhāva*) こと、(138) すべての仏と抵触のない智慧に入ること、(139) 智慧に妨げのないこと、(140) 菩提に向かう心が成熟していること、(141) 仏の他に依らない智慧、(142) 善知識たちを師と思うこと、(143) 菩薩たちを分断させないこと、(144) 魔の諸の行為を排除すること、(145) すべての〔生存の〕状態 (\**gati*) を幻 (\**nirmita*) と等しい〔とみること〕、(146) 如来を見ることを幻影 (\**pratibhāsa*) と等しい〔とみること〕、(147) 菩提心を探求すること、(148) 諸波羅蜜に対する等しい心、(149) 如来たちを見ることを究極の真実 (\**bhūtakoti*) と等しい〔とみること〕、(150) すべての仏をあらゆる功德の法と等しいと〔みること〕、バドラパーラよ、以上が般舟三昧と呼ばれる。

このように多くの項目を列挙して般舟三昧が何かを定義する。そして、これが大乘に特有の形式となっており、三昧を説明する際に下線で示した「○○三昧とは何か」(\**katamaś ca sa... nāma samādhiḥ*) という冒頭の句と、「以上が○○三昧と呼ばれる」(\**ayaṃ sa ucyate... nāma samādhiḥ*) という末尾の句と共に項目を列挙するというのが共通の定型となっている<sup>3)</sup>。

この部分に関しては蔵訳の他に四つの漢訳 (T.416, T.417, T.418, T.419) が現存する。『三卷本』(T.418) は「何等爲定意」(T.13, 904b24-905a05) として冒頭の句を反映している。特に『拔陂經』(T.419) は冒頭のみならず、末尾の句に関しても「是爲現在佛面住定意」(T.13, 921b17-921c29) と訳出して反映する。また、『三卷本』の抄訳とされる『一卷本』(T.417) では一句三字の偈頌へと改変されているが (T.13, 898b10-899a08)、中には項目と対応する偈が見出され、「是爲定」という末尾の句を反映したものも確認できる。したがって、『賢護分』(T.416) のみが「若有菩薩具足成就此三昧者。即獲如前諸功德事。亦得其餘殊異功德」(T.13, 0875a03-a04) という他には見当たらない一文を説き、般舟三昧の功德が何かを説明する体裁になっているのは、原文ではなく漢訳者の理解を反映していると見るべきであろう。

## 2.2. 項目の内容

先に全体像を確認し、般舟三昧とは何かを150項目で定義していることを確認した。問題は項目のほとんどに般舟三昧との本来的な関連性が見出だせないことである。他の項目を見てみると、

3) cf. Śgs P 284a5-286b4, D 260b1-262b4:

*blo gros brtan pa / de la dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin de gang zhe na / 'di lta ste / nam mkha'i kham bzhin du sems bskyed pa shin tu yongs su sbyang ba byas pa dang / sems can thams cad kyi sems la rtog pa mngon sum du gyur pa dang / sems can thams cad kyi dbang po mchog dang /... byang chub sems dpa'i chos nyid de 'ang mi gtong zhing shin tu phung po med par yang mya ngan las mi 'da' ba, 'di ni / blo gros brtan pa dpa' bar 'gor ba'i ting nge 'dzin ces bya ste /... cf. SRS I 15,9-23,5:*

*katamaś ca sa kumāra sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcito nāma samādhiḥ. yaduta kāyaśaṃvaraḥ, vākaśaṃvaraḥ, manāśaṃvaraḥ,... ekanirdeśaḥ sarvabhavagatyupapattiyāyatanānā m, ayaṃ sa kumāra ucyate sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcito nāma samādhiḥ.*

*gnyen rnams yongs su spong ba* / (PSS 2E)

(21) 親族たちを捨てること

*skyes pa'i sa ring du byed pa* / (PSS 2E)

(22) 故郷を遠ざけること

*nga rgyal tsar gcod pa* / (PSS 2E)

(36) 我慢を絶やすこと

*gzhan gyis rnyed pa la phrag dog med pa* / (PSS 2E)

(37) 他人が得たものを嫉まないこと

*sems can la phan pa'i gzhir gyur pa* / (PSS 2E)

(38) 衆生を利益する依り処 (\**sattvāhitādhīṣṭhāna*) となること

*sems can thams cad la sems mnyam pa* / (PSS 2E)

(39) すべての衆生に対する心の等しいこと

*sems can thams cad la mar 'du shes pa, phar 'du shes pa, bur 'du shes pa* / (PSS 2F)

(43) すべての衆生を母であると思うこと、父と思うこと、息子と思うこと

*sems can thams cad la nyon mongs pa med par 'du shes pa* / (PSS 2F)

(44) すべての衆生を煩惱なきものと思うこと

*sangs rgyas dang mthun pa* / (PSS 2G)

(52) 仏と調和すること

*chos mi spong ba* / (PSS 2G)

(53) 教えを棄てないこと

*dge 'dun mi 'byed pa* / (PSS 2G)

(54) 僧団を分裂させないこと

*snyen pa rnams smra ba* / (PSS 2G)

(61) 快い〔言葉〕を話すこと

*sgrib pa lnga spong ba* / (PSS 2G)

(62) 五蓋を除くこと

*mi dge ba bcu'i las kyi lam rnam par spong ba* / (PSS 2G)

(65) 十不善業道を放棄すること

*dge ba bcu'i las kyi lam sgom pa, stobs bcu sgrub pa* / (PSS 2G)

(66) 十善業道を修習すること

*'phags pa'i lam yan lag brgyad pa dang mthun pa / (PSS 2G)*

(75) 八支聖道に従うこと

*bsam gtan la mi chags pa / (PSS 2G)*

(76) 禪定に執着しないこと

*sems can du 'du shes pa spong ba / (PSS 2H)*

(88) 有情 (\**sattva*) に対する想を棄てること

*srog tu 'du shes pa mi dmigs pa / (PSS 2H)*

(89) 命 (\**jīva*) に対する想を対象としないこと

*gang zag tu 'du shes pa yongs su spong ba / (PSS 2H)*

(90) 人 (\**pudgala*) に対する想を完全に取り除くこと

*kham rnam la sprul gdug par 'du shes pa / (PSS 2H)*

(97) 〔十八〕 界を毒蛇 (\**āśīviṣa*) と思うこと

*skye mched rnam la grong stong bar 'du shes pa / (PSS 2H)*

(98) 〔十二〕 処を空虚な村 (\**sūnyagrāma*) と思うこと

*kham gsum la mi bde bar 'du shes pa / (PSS 2H)*

(99) 三界を不幸と思うこと

*mya ngan las 'das pa la phan yon du lta ba / (PSS 2H)*

(100) 涅槃を至福であるとみること

*lhag pa'i bsam pas dge ba / (PSS 2I)*

(114) 優れた意志が高潔であること

*sems las su rung ba / (PSS 2I)*

(115) 心がかろやか (\**karmanyatā*) であること

*chos thams cad la mnyam pa / (PSS 2I)*

(125) すべてのことがらを等しい〔とみる〕こと

*'jig rten dang mi rtzod pa / (PSS 2I)*

(126) 世間と争わないこと

などが挙げられるが、ここには般舟三昧を定義するのに疑問を生じるような項



目しか挙げられていない。どちらかといえば「十善業道を修習すること」や「八支聖道に従うこと」など、仏教に普遍的な内容を示すものが多く見られ、これらが般舟三昧を定義するのに相応しい項目とは考えられない<sup>4)</sup>。

### 2.3. 項目との関連性

しかし、お互いの関連性に関して本經は次のように言及する。

*bzang skyong / chos de rnams ni ting nge 'dzin de yongs su skyed par 'gyur te /  
bzang skyong / de la ting nge 'dzin gang chos de rnams kyis yongs su skyed par  
'gyur ba'i ting nge 'dzin de gang zhe na / 'di lta ste / da ltar gyi sangs rgyas  
mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin to //* (PSS 3A)

バドラパーラよ、これらの諸法<sup>5)</sup> (\**dharma*) がこの三昧を生じる。そこでバドラパーラよ、これらの諸法によって生じる三昧は何かというと、つ

4) これと同様の見解が他の經典の考察からも示されている。〈三昧王經〉でも同じ形式で327項目を列挙しているが、その内容に関して田村1975は「三百二十七句の羅列は…その内容を見ると、小乗、大乘のあらゆる宗教的、哲学的、そして倫理的な原理を含んでおり、一經典の要約というよりはむしろ仏教全体の特質の要約である」(田村 1975, 325 fn. 29)と述べている。また、Skilton 2002も同じく項目と三昧の間に関連性が見られないことを指摘している (Skilton 2002, 59-68)。

5) ここでの「諸法」(*dharma*) が何を意味するのかは難解である。先行訳を参照すると、梶山は「諸徳」(梶山 1992, 269) とし、T.416の漢訳者に近い意味(功德法: T.13, 875b22)で訳している。林も「諸法」(林1994, 19)として訳に解釈を含めていない。Harrison は英訳では“those *dharma*s” (Harrison 1990, 31) としているが、この前半部の概要を説明する際には、これら *dharma* を“attributes”や“attitudes”に関するものと見ている (Harrison 1990, xxviii)。また、Skilton は〈三昧王經〉が本經と同様に列挙する *dharma* に関しても、“affect”や“deportment”に関するものが多数見られると説明しており (Skilton 2002, 61)、両者が互いに“attitude”や“deportment”といった言葉で説明していることに注目する。本稿ではこれらの理解を踏まえつつ項目の内容を鑑みた上で、この *dharma* を「あり方」といった意味で理解する。「あり方」という訳語自体は、長尾雅人と櫻部建による〈迦葉品〉の翻訳(=長尾 1974)に見られる。〈迦葉品〉には *catvāra ime kāśyapa dharmā bodhisatvasya ...* (KP 2,2. etc.) という四法の説示が頻出するが、これを「カーシャパよ、つぎのような四つのあり方(法)があるとき、菩薩は…」(長尾 1974, 7,11)と訳している。そして、ここで *dharma* として挙げられるのは「教えと、教えを説く師に対して尊敬の念のないこと」*agauravo bhavati dharme ca dharmabhāṇake ca* (長尾 1974, 7,12 ;KP, 2,3-4.) など、否定的な文脈ではあるが今回と同じ仏教に普遍的な内容を説いており共通している。

まり般舟三昧である。

この一節は先に示された定義と一連の内容を説くものであり<sup>6)</sup>、ここで言う「諸法」とは先立って列挙された項目を指す。したがって、この一節では項目が般舟三昧を生じる云々と述べて、お互いの因果関係を説いていることになる。そして、このようにお互いの因果関係に言及した所で前半部の説明が終わる。

しかし、例えば「善知識に仕えること」という項目を代表例として考えてみても、ここでの定義は「善知識に仕えることは般舟三昧である」という理解し難いものになっている。そして、このような定義の成り立ちに関して本経は何ら解説しようとしな。ところが、ここで説かれた因果関係を例に当てはめると、この定義が「善知識に仕えること（原因）は般舟三昧（結果）である」という構造で説かれていることがわかる。そして、この構造が後の考察に重要となってくる。

尚、この一節の存在が考察の要となるから、次項に進む前に諸本を確認しておく。まず、『賢護分』の相当箇所には「賢護。當知更有無量功德。然亦緣此三昧而生」とある。ここでは無量の功德が般舟三昧によって生じることを説いているが、先と同様に、これに関しても漢訳者の理解を反映したものと見るべきである。残りの諸本は蔵訳と同じく、諸法が般舟三昧を生じるという趣旨を説いている。『三卷本』では「持是行法故致三昧。便得三昧現在諸佛悉在前立。」(T13, 905a04-05)とあり、『一卷本』にもこれとほぼ同じ文が見られる(T13, 899a09-10)。『拔陂經』では「亦用是法定意爲具來。何等定意具將是法來。所謂現在佛面住定意<sup>7)</sup>」(T13, 921c29-922a02)とあり、蔵訳と同じ形で原典を

6) この一節は蔵訳では第三章の冒頭 (PSS 3A) に位置しているが、内容からすれば第二章の終わり (PSS 2J) に位置すべきものである。

7) 原文では「亦用是法定意爲具來。何等定意具將是法來。所謂現在。現在佛面住定意爲何等…」となっているが、下線部は「所謂現在 (+ 佛面住定意)。現在佛面住定意爲何等…」と校訂して読むべきである。このようであれば蔵訳対応箇所にある *'di lta ste / da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin to // bzang skyong / da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de yang gang zhe na* (PSS 3A) と一致する。



反映している。したがって、この一節は最古の資料である『三卷本』が支婁迦讖によって漢訳された二世紀<sup>8)</sup>の時点には存在しており、藏訳など後代の資料にのみ付加されたものである可能性はない。

さて、以降では上述の構造に着目しながら、阿毘達磨における定義の成立論を参照する。実は阿毘達磨ではこの構造でもって認められる定義が存在し、その理由についても論師が解説している。特にこの前半部と論師の解説を対照することによって、今確認した因果関係への言及が重要な役割を果たしていることや、その結果、この前半部の定義が阿毘達磨と同じ「A（原因）はB（結果）である」という構造で成り立っていることが明らかになる。

### 3.1. 果立因名 / 因立果名

論師の解説を見る前にまず、經典解釈論を参照しておく必要がある。經典解釈論は複数存在するが、今回参照するのは「果立因名」と呼ばれるものである。実際にどのようなものかを見るために、以下に經典（NidSa 13.1）を引用する。

*nāyaṃ bhikṣavaḥ kāyo yuṣmākaṃ, nāpy anyeṣāṃ. ṣaḍ imāni sparśāyatanāni pūrvam abhisamskṛtāny abhisamcetitāni paurāṇaṃ karma veditavyam iti vadāmi.*<sup>9)</sup>

「比丘たちよ、これはあなたたちの身体ではなく、他人の〔身体〕でもないのである。これは以前に発動され、仕組まれた六触処なのであって、過去の業であると知らなければならない」と私は言う。

この經典の文言に対して解釈が必要になるのは、六触処は過去の業であると説かれたことに対してである<sup>10)</sup>。そして、〈婆沙論〉に「六触処は過去の業と説くように、結果に対して原因の名を立てる」（如六觸處説名故業。果立因

8) 『三卷本』は支婁迦讖による光和二年（179年）の訳出と伝わる。cf. 『出三蔵記』 T.55, 48c09-16.

9) NidSa 144-145. cf. SN 12.37, 『雜阿含』 T.2, 84a23-a26.

10) cf. 舟橋 1972, 1-11, 舟橋 1974, 45-65, 藤田 1979, 131-144.

名<sup>11)</sup>とあるように、これを結果（六触処）に対して原因（過去の業）の名前で呼んだものと解釈する<sup>12)</sup>。当然ながら、この逆の「因立果名」というのも存在し、原因に対して結果の名前で呼ぶことも認められる。要するに、原因と結果は物事の二つの側面を指す名称に過ぎず、結果に対して原因、または原因に対して結果の名前で言い換えることが認められるということである。しかし、これらはあくまで経典解釈論であるから、経典に既に説かれてある文言を解釈するための理屈であり、新たに何かを定義するという次元の話ではない。この時点で留意すべきなのは、少なくとも阿毘達磨では因果関係に基づく言い換えが経典解釈のレベルで認められているということである。

### 3.2. 論師の解説

では、なぜ「A（原因）はB（結果）である」という構造が定義を認めさせることになるのか。それは論師による解説を参照することで明らかになる。以下で引き続き〈婆沙論〉から二つの用例を参照する。

斷是擇滅雖非遍知。是遍知果故名遍知。如六觸處說名故業。果立因名。遍知亦爾<sup>13)</sup>。

11) 『新婆沙』T.27, 465a22. cf. 『旧婆沙』T.28, 132c28: 如六入是業果。以業名說如此。六入是本業。尚、この理屈は *phale hetūpacāraḥ* (AKBh 25,13) と解説されることでも知られている。

12) この経典解釈例は〈婆沙論〉では常に例証として引かれるようである（『旧婆沙』T.28, 123b18-b19, 132c28-c29, 242a5-a06: 如經中說。六入是業。六入是業果。以業名說；如六入是業果。以業名說。如此六入是本業；如說六入是舊業。『新婆沙』T.27, 321a6-a7, 465a22-a23: 如六觸處是業果故亦名舊業；如六觸處說名故業果立因名）。したがって、〈婆沙論〉が編纂された年代（二世紀頃\*）には周知の解釈例となっていたと考えてよいだろう。また、北伝のみならず南伝でも用いられていることが知られており\*\*、阿毘達磨の経典解釈例として広く知られていたと考えられる。

\* 二世紀頃というのは、『新婆沙』におけるカニシカ王に関する記述（T.27, 593a15, 1004a05）から想定された年代である。cf. 木村1968, 206-211, Cox 1995, 33-34, Dessein 2009, 44, Bronkhorst 2012, 493.

\*\* ブッダゴーサによる SN 12.37の注釈に見られる。cf. 舟橋1972, 2.

13) 『新婆沙』T.27, 465a21-23. cf. 『新婆沙』T.27, 175b8-b14: 云何斷遍知。答諸貪永斷。瞋癡永斷。一切煩惱永斷。是謂斷遍知。問於所緣境能遍知故立遍知。名斷無所緣及遍知用何故名遍知。答斷是智果故亦名遍知如阿羅漢。是解果故亦說名解。天眼天耳是通果故亦說名通。

断は擇滅であって遍知ではないといっても、この〔断〕は遍知の結果であるから遍知と称す。六触処を過去の業と称すように、結果に対して原因の名前を立てるのである。遍知の場合もそれと同様である。

ここでは『発智論』で「断は遍知である」と定義されたことについて<sup>14)</sup>、論師が解説を加えて正当性を主張している。前半部との対照としては、本来的に関連性のない断と遍知に関して、断が「遍知の結果である」という因果関係への言及が見られる点に注目すべきである。その結果、この定義は「断（結果）には遍知（原因）である」という構造で説かれることになる。その後、論師は先に確認した經典解釈論を持ち出してくる。つまり、「六触処（結果）は過去の業（原因）である」とする經典解釈例を引き合いに出し、この定義にも同じく果立因名の理屈が通ると主張するのである。この用例では「A（結果）はB（原因）である」という構造になっているが、続いて参照する用例は前半部と同じ「A（原因）はB（結果）である」という構造で説かれる。

復次此中諸忍以智名説。能引智故。因立果名。如飢渴名因彼因觸<sup>15)</sup>。

また次に、この内の諸々の忍は智の名を立てる。智を引き起こすことができるからである。原因に対して結果の名前を立てる。飢渴をその原因となる〔所〕触に因んで〔名付けて称すのと〕同様である。

ここでは「忍は智である」という定義に関して解説する。先の場合と定義の構造が逆になるだけで、論法としては同じである。まず、忍が「智を引き起こ

---

内六處等<sup>14)</sup>是業果故説名故業。『旧婆沙』T.28, 132c23-c29: 云何斷智。答曰。若一切愛恚癡斷。一切煩惱斷名爲斷智。問曰。如斷無所縁智有所縁。何以説斷名智耶。答曰。或有説者。以斷是智果故。斷名爲智。如阿羅漢。是智果以智名説。如天眼天耳是通果。以通名説。如六入是業果。以業名説如此。六入是本業。如是斷是智果。故説名斷智。

14) 『発智論』T.26, 924c02-c03: 云何斷遍知。答諸貪永斷。瞋癡永斷。一切煩惱永斷。是謂斷遍知。『八犍度論』T.26, 778c28-779a01: 云何盡智。答曰。姪怒癡盡無餘。一切結盡無餘。是謂盡智。

15) 『新婆沙』T.27, 334a20-21. 『旧婆沙』対応無し。cf. 『発智論』T.26, 940c12-c13.

すことができる」と言って因果関係に言及する。その結果、この定義は「忍（原因）は智（結果）である」という構造になり、これが因立果名の理屈で解釈できると主張する<sup>16)</sup>。つまり、今話題にしている構造は經典解釈論と同じ理屈で解釈できる構造ということになる。そして、この理屈に基づくからこそ定義の成立が認められるのである。

これら論師の解説と対照すると、本来的に関連性のないもので定義する際、本經の編纂者と論師は、同じく因果関係に言及することによって「A（原因）はB（結果）である」という構造で定義を説いていることになる。したがって、前半部における因果関係への言及が無作為に説かれているとは考えられず、延いては經典解釈論と同じ理屈がここにも当てはまることになる。興味深いのは、本經の編纂者たちがこの理屈をどこから知ったのかという点である。これに関しては、因立果名の理屈自体がインドの世間的な言い回しに由来することもあり<sup>17)</sup>、論師の主張する構造との一致をもって、直線的に經典解釈論と結びつけることはできない。インド一般の知識として同じ理屈を想定していた可能性を現時点では否定できないからである。いずれにせよ、阿毘達磨を参照することによって、この前半部の定義が「A（原因）はB（結果）である」という構造で成り立っており、これが原因と結果を言い換えたものとして認められるとい

---

16) 引用の最後に「如飢渴名因彼因觸」と述べているのは、所触 (*spraṣṭavya*) の内の一つが飢渴 (*jighatsā*) と呼ばれる問題を取り扱ったものである。阿毘達磨では、所触自体は飢渴ではないが、それが飢渴を生じさせる原因となるから「飢渴」と呼んでもよいと理解されている。これが經典解釈例かどうかは定かでないが、この「所触」の議論にはさらなる例証が引かれることが知られており、その例証として經典 (Dhp 194) に「諸仏の出現は楽である…」 *buddhānāṃ sukha utpādaḥ* ... 云々と説かれるのが「諸仏の出現（原因）は楽（結果）である」とする經典解釈例を引き合いに出すことが知られている (cf. AKBh 7,11-13; Up 1012)。

17) 『成実論』には今回参照した經典解釈論についての解説がある (T.36, 248a14-249a11)。それを参照すると、「食錢」という世間的な言い回しをこの經典解釈論の例証として引いていることがわかる。食錢は食べ物を食べるという意味であるが、お金によって食べ物を得るのだから、食べ物（結果）の意味でお金（原因）の語を用いることが認められているのであり、世間の人もこれを結果を原因で言い換えた言い回しとして理解していたことがわかる。『成実論』が解説に用いた「食錢」自体がインド由来かどうかは定かでないが、これと同じ様な言い回しがインドにあったことは疑いない。これは今回の經典解釈論に見る理屈が世間的な知識に起因することを示している。尚、この『成実論』の記述は田中裕成氏のご教示によって知り得た。ここに感謝申し上げる。



うことが明らかになった。

#### 4. 前半部の目的

次に前半部の目的について言及しておきたい。まず、この前半部に説明としての機能や意義があるかどうかは疑問である。冒頭でも述べたように、「行品」において般舟三昧の説明は前半部と後半部で二度行われている。比較のために、以下に後半部の説明の一部を引用する。

*bzang skyong / da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de yang gang zhe na / ... tshul khrims yongs su rdzogs par spyod par 'gyur la / des gcig pu bden par song ste 'dug nas / ... des kyang sems ma g-yengs pas de bzhin gshegs pa yid la byed do //... nyin zhag gcig gam / gnyis sam / gsum mam / bzhi 'am / lnga 'am / drug gam / nyin zhag bdun du yid la bya'o // (PSS 3A-3B)*

バドラパーラよ、その般舟三昧とは何か。…戒を完全に保った上で、そ〔の行者〕は一人で閑かな場所へ向かい、座ってから、…そ〔の行者〕は乱れの無い心で如来を作意する（\**manasi-Kṛ*）。…一昼夜、あるいは二〔昼夜〕、あるいは三〔昼夜〕、あるいは四〔昼夜〕、あるいは五〔昼夜〕、あるいは六〔昼夜〕、あるいは七昼夜の間、作意すべきである。

後半部も前半部と同じ様に「般舟三昧とは何か」を説明しているが、ここでは実践に必要な事項を説いている。この他、この三昧の中で阿弥陀仏と対面することや（PSS 3A-3C）、この三昧に入って仏に何を質問すべきか（PSS 3E）などを説明しており、後半部は確かに般舟三昧を説明しているといえる。しかしこれに比べると、前半部に説明としての機能はおろか、意義を見出すことは難しく、説明すること自体に目的があったとは考えにくい。むしろ、何か別の目的のために世尊が説明するという体裁を取ったと見る方がよい。

既に確認したように、前半部で列挙される項目には般舟三昧との本来的な関連性がなく<sup>18)</sup>、これが説明としての不可解さを生じる原因になっている。しか



し、見方を変えれば、ここにそのような項目を列挙することで「般舟三昧とは何か。(1)項目、(2)項目、(3)項目、…以上が般舟三昧と呼ばれる」と世尊が説いたことになり、その結果、関連性のないものが関連付くということになる。つまり、ここでの目的が項目との関連付けにあったと見るのである。

では、なぜ関連付ける必要性があったのかということが問題になる。そしてこれに関しては、大乘の新たな三昧を提唱するに際して、仏教的な裏付けがあることを示す必要性を想定する。例えば、〈首楞嚴三昧經〉には世尊が衆会に対して首楞嚴三昧を説示したところ、その場に居合わせた全員が次のように考えたとある。

*bdag cag gis dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin gyi ming tsam yang sngon ma thos na / rgya cher rnam par phye zhing bshad pa lta ci smos te /* (Śgs P 280b6-7, D 257a7-257b1)

私たちは首楞嚴三昧という名前すらもこれまでに聞いたことがない。広く詳らかにされ、説明されたことがないのは言うまでもない。

経典の中でもそうであるように、現実でも同じ反応を得たに違いない。そして、これは般舟三昧にとっても例外ではない。しかし、新たな三昧を提唱するとしても、仏教的な裏付けがなければ仏教徒に受け入れられないことは言うまでもない。列挙される項目の内容を鑑みると「十善業道を修習すること」や「八支聖道に従うこと」など、仏教に普遍的な内容が多く見られることは既に述べた。これは般舟三昧の説明には不相応であるが、仏教的な裏付けを示すには相応しい内容といえる。それらと般舟三昧が関連付くことにより、この三昧が仏教的な裏付けをもつことが示されたことになるのである。このように考えれば、般舟三昧の説明としては不相応な、しかし仏教に普遍的な項目が多く列挙されることにも説明が付く。

---

18) この後半部の説明を鑑みると、前半部における第一番目の項目「仏陀を対象とした思いに集中すること (\**manasikāra*)」は般舟三昧との本来的な関連性があるといえるだろう。しかし、残りの大半は本文で引用して確認した通りである。

## 5. おわりに

今回の考察の結果、前半部の定義が「A（原因）はB（結果）である」という構造で成り立つことが明らかになった。阿毘達磨ではこれと同じ構造の定義が経典解釈論の理屈に基づいて主張されるが、本経の編纂者たちがどのような経緯でこの構造に着目するに至ったのか興味深い。そして、この不可解な説明の目的についても言及した。当時新出であった般舟三昧に仏教的な裏付けがあることを示すため、仏教に普遍的な内容と関連付ける目的があったと想定した。

このような想定が可能なのは、般舟三昧の説明が二度行われるからであり、実践に必要な事項を示す「行品」後半部に相對すると、前半部に説明としての機能や意義が見出せないことによる。しかしその一方で、他の大乘経典で三昧が説かれる場合には、本経で言うところの前半部の説明が主体となっており、ましてや後半部のように実践を説明する部分は存在しないことが多い。他の大乘経典として、例えば〈三昧王経〉は前半部と同じ形式を主体とし、実践に関する説明をすることがない（cf. Skilton 2002）。他に〈首楞嚴三昧経〉も同様である（cf. 吹田 2020）。これらの経典に説かれる三昧は明確な実践をもたず、その実態を把握することが極めて難しくなっているが、その要因は項目を列挙するだけで三昧が説明されたことになっている点にある。なぜこのように不可解な説明が主体となり得るのか。今後、この形式の起源や役割などが三昧との関わりにおいて解明されなければならない。

### 《略号・参考文献》

- AKBh : *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, Ed. P. Pradhan, Patna 1967.
- KP : *The Kācāpaparivarta: a Mahāyānasūtra of the Ratnakūṭa class, Edited in the Original Sanskrit in Tibetan and in Chinese*. Ed. Staël-Holstein, Baron Alexander Wilhelm von, Shanghai: Commercial pres. Rpt. Tokyo: Meicho-Fukyū-kai, 1977.
- NidSa : *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamūyuta*, Ed. Ch. Tripāṭhī, Berlin, 1962.
- PSS : *The Tibetan Text of the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*, Studia Philologica Buddhica Monograph Series I, Ed. Harrison, Paul, Tokyo: Reiyukai Library, 1978.
- SRS I : *Gilgit Manuscripts, Vol. II (Samādhirāja Sūtram)*. Part 1 Ed. Dutt, Nalinaksha, and Vidyavaridhi Shiv Nath Sharma, Shirinagar, 1941.

- Śgs : Peking Tripiṭaka vol. 32, mdo sna tshogs, thu 276a4-344a5 (#800)/ The Tibetan Tripiṭaka Taipei edition vol. 11 mdo sde, da 253b5-316b6 (#132).
- Up : 本庄良文『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇』上下, 大藏出版, 2014.
- 『賢護分』: 闍那崛多訳『大方等大集經賢護分』(T. vol. 13, no. 416) .
- 『一卷本』: 支婁迦讖訳『佛說般舟三昧經』 (T. vol. 13, no. 417) .
- 『三卷本』: 支婁迦讖訳『般舟三昧經』 (T. vol. 13, no.418) .
- 『拔陂經』: 失訳『拔陂菩薩經』 (T. vol. 13, no. 419) .
- 『発智論』: 玄奘訳『阿毘達磨發智論』 (T. vol. 26, no. 1544) .
- 『新婆沙』: 玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』 (T. Vol. 27 no.1545) .
- 『旧婆沙』: 浮陀跋摩訳『阿毘曇毘婆沙論』 (T. Vol. 28 no.1546) .
- 『成実論』: 鳩摩羅什訳『成實論』 (T. Vol. 32 no.1646) .
- Bronkhorst, Johannes 2012: “Reflections on the origins of Mahāyāna” *Estudios Filológicos* 337: 496-502.
- Cox, Collett 1995: *Disputed Dharmas: Early Buddhist Theories on Existence: An Annotated Translation of the Section on Factors Dissociated from Thought from Saṅghabhadra’s Nyāyānusāra*. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.
- Dessein, Bart 2009: “The Mahāsāṃghika and the origin of Mahayana Buddhism: Evidence Provided in the Abhidharmamahāvibhāṣāśāstra.” *The Eastern Buddhist*, New Series 40( 1 ): 25-61.
- Harrison, Paul 1990: *The Pratyutpanna-buddha-sammukhāvasthita-samādhi-sūtra, an Annotated English Translation of the Tibetan Version with Several Appendices*, Tokyo, The Reiyukai Library.
- Skilton, Andrew 2002: “State or Statement? : Samādhi in Some Early Mahayāna Sutras.” *The Eastern Buddhist*, New Series 34( 2 ): 51-93.
- 梶山雄一 1992: 「般舟三昧經—阿弥陀仏信仰と空の思想」, 『浄土仏教の思想 第二巻 観無量寿經 般舟三昧經』, 講談社 . pp. 199-348.
- 木村泰賢 1968: 『木村泰賢全集 第四巻』, 大法輪閣.
- 田村智淳 1975: 『大乘經典10 三昧王經 I』, 中央公論社.
- 丹治昭義 1974: 『大乘經典 7 維摩經 首楞嚴三昧經』, 中央公論社.
- 長尾雅人・櫻部建 1974: 『大乘經典 9 宝積部經典』, 中央公論社.
- 林純教 1994: 『藏文和訳 般舟三昧經』 大東出版社.
- 吹田隆徳 2016: 「般舟三昧と仏随念の関係について」, 『印仏研』 65( 1 ): 190-193.
- . 2020: 「三昧經典類に見る特異な三昧について」, 『印仏研』 (近刊).
- 藤田宏達 1979: 「原始仏教における業思想」, 『業思想研究』, 平楽寺書店, pp. 99-144.
- 舟橋一哉 1972: 「初期佛教の業思想について—相應部の一經典の解釈をめぐって—」, 『仏教学セミナー』 16: 1-11.
- . 1974: 「佛教における業論展開の一側面—原始佛教からアビダルマ佛教へ—」, 『仏教学セミナー』 20: 45-65.